

**日本独文学会**  
**春季研究発表会**  
**要旨集**

**2026年5月23日（土）・5月24日（日）**

第1日 午前10時より  
第2日 午前10時より

**会場 上智大学**

**四谷キャンパス 12号館**  
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1  
E-Mail: tagung2026sophia@jgg.jp

**日本独文学会**

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603  
Tel./Fax: 03-5950-1147  
E-Mail (メールフォーム) : <http://www.jgg.jp/mailform/buero>

2026 年春季研究発表会 発表者・発表会場一覧

						A 会場 (12 号館 502)	B 会場 (12 号館 402)	C 会場 (12 号館 302)	D 会場 (12 号館 202)	ドイツ語教育部会 (12 号館 102)
1 日目	総会 10:00~11:30									
	日本独文学会・ DAAD 賞授賞式 11:40~12:20					ドイツ語教育部会 総会 12:40~13:10				
	ドイツ語学文学振 興会授賞式・総会 12:30~13:30		H. Heit 教授招待講演 13:20~14:20		ドイツ語教育部会講演会 平高 史也 13:20~14:20					
	シンポジウム I		文学、文化・社会 I		語学、ドイツ語教育 I		ブース発表			
	1960 年代以降の 知識人 14:30~17:30		森下 勇矢 14:30~15:05		若井田 雅仁 14:30~15:05		言語学に見られる パラダイムシフト 14:30~16:00		大学入試問題展示 DaF-Café 13:00~17:00	
			石野 光俊 15:10~15:45		池田 裕行 15:10~15:45					
			石上 淳史 15:50~16:25		田中 慎 15:50~16:25					
寒河江 陽 16:30~17:05			城山 月花 16:30~17:05							
懇親会 (18:00~20:00)										
2 日目	A 会場 (12 号館 502)		B 会場 (12 号館 402)		C 会場 (12 号館 302)		D 会場 (12 号館 202)			
	シンポジウム II		文学、文化・社会 II		文学、文化・社会 III		語学、ドイツ語教育 II			
	トーマス・マンの 間メディア性 10:00~13:00		藤田 隼風 10:00~10:35		C. P. Reinelt 10:00~10:35		Sabine Randhage 10:00~10:35			
			相馬 大樹 10:40~11:15		Manuel Kraus 10:40~11:15		Ralph Degen 10:40~11:15			
			相馬 巧 11:20~11:55		Adam Jambor 11:20~11:55		Frank Nickel 11:20~11:55			
閉会の挨拶										

ハラスメント対策 WG ブース (12 号館 301、1 日目 14:30~2 日目閉会まで)

## 第1日 5月23日(土)

### シンポジウム I (14:30~17:30)

A会場 (12号館 502)

#### 1960年代以降の知識人 ——文芸的公共圏と政治的公共圏の交差——

司会：小林 哲也

本シンポジウムは、新左翼運動の隆盛の中で強く政治性を帯びた1960年代を中心に、その前後で生じた文芸的公共圏と政治的公共圏の関係の変化について検討する。

J・ハーバーマスは『公共性の構造転換』(1962)において、理性的討議を基礎に据えつつ、文芸的公共圏と政治的公共圏を接合した公共圏モデルを提示した。しかし、1970年代以降——A・クルーゲやO・ネクトの『公共圏と経験』(1972)に顕著なように——「私的なもの」の排除という点から、批判の対象ともなったそのモデルは、近年に至って、一層大衆化した公共圏が情動の馴致や扇動の場となり果てている現状を踏まえると、再検討なしに維持されることは難しい。本シンポジウムでは、批判的な市民運動が開花し、ハーバーマスが啓蒙期に見てとった理念が現実化するように見えた1960年代を出発点として、文芸的公共圏と政治的公共圏の交差を知識人たちの理論と実践に即して明らかにし、その意義と課題を検討し直すものである。この間蓄積された現代史・思想史・文学史の研究成果を踏まえると同時に、当時の議論の単線的な焼き直しを避けるべく、テキストの受容的側面、知識社会学的アプローチ、および政治学の最新動向も踏まえた学際的な視座から、「大衆」、「東側」、「第三世界」との緊張関係、美や情動をめぐる言説を検討していく。

詳細は下記の通りだが発表・ディスカッションを通じて提示していくテーゼを概観しておく。1) アドルノやマルクーゼの受容に関しては、思想面にのみ注目が集まる傾向にあるが、時代との関連で彼らの公共圏理解を捉え返すことで、そのポテンシャルとアクチュアリティを探り出すことができるだろう。2) これと関連して重要になるのが、彼らの議論の場を形成する、テキストの編纂・出版という公共圏の物質的基盤の検討である。西ドイツでの出版者、新聞、雑誌の編集者の役割の検討、東ドイツでの出版体制との比較を通じて、1960年代以降の公共圏の状況を明らかにする。3) 文芸と政治の関係、理論と実践の関係、その中で知識人の役割は、政治体制、文化的伝統の違いに応じて当然異なってくる。本シンポジウムは、ドイツを中心として議論を深める一方で、アメリカ合衆国での状況の検討、「第三世界」との緊張関係といった視点も取り入れ、広い視座から公共圏のあり方を検討する。

4) 新左翼運動の隆盛の中で、文芸的言説の政治的言説への従属が起こり、ハーバーマスの議論もこうした中で層をなした批判・吟味を行う討議的主体をモデル化した。こうしたモデルを普遍化することを批判し、美的言説と政治的言説の峻別を行ったボーラーの視点を取り入れて、60年代以降の公共圏の在り方を再考する。

## 1. アドルノと「大衆」—文芸的公共圏から政治的公共圏へ

橋本 紘樹

テオドール・アドルノ (1903-1969) の文章が、読者の理解を拒むほどに難解であることはよく知られている。しかし一方で、1950-60年代の西ドイツでは、そのテキストが広く受容され、議論され、学生運動の興隆期には強く政治的な意味合いを獲得するに至った。

本発表では、アドルノの「大衆 (Masse)」観を抑えつつ、当時 *edition suhrkamp* という文庫シリーズによって販路拡大を企図していたズーアキャンプ社との協働関係にも着目することで、この落差について検討したい。

文化産業を忌み嫌うエリート主義者アドルノというクリシェについては、近年、メディア論や知識人論などの観点から見直しが図られている (竹峰 2007, 2016, 橋本 2025)。ただし、そこでは当時の出版事情や、受容者たる「大衆」への複合的な視線が、十分に考慮されてこなかった。

戦後に執筆された「世論」や「階級」をめぐる一連の論考やエリアス・カネッティとの対話では、「大衆」を一つの固定的な集団として捉えることへの疑義が呈され、「個人」と「社会」の根本的な関係性を再考する必要性が説かれている (z. B., Adorno 1962, 1964)。こうした理論的考察と、版元であるズーアキャンプ社の代表者たちとの往復書簡 (Adorno/Suhrkamp und Unseld 2003) を総合的に視野に収めることで、テキストの理解・流布をめぐるアドルノの実践とその政治的波及力、およびそれを可能にした当時の「(文芸的/政治的) 公共圏」の様相が明らかとなるだろう。

## 2. 東ドイツのベンヤミン —1960-70年代における遺稿編集・出版をめぐって

田邊 恵子

戦後、ヴァルター・ベンヤミンの遺稿が東西ドイツそれぞれで保管されていたことを背景として、1960-70年代の作品受容には冷戦時の思想的対立が反映されることとなった。ただし、西ドイツでの受容の経緯がよく知られているのにたいして、これまで東ドイツにおける出版状況は、国際的な研究においてもほとんど議論の俎上に載せられてこなかった。しかし近年、エルトムート・ヴィツィスワ (Erdmut Wizisla, *Kalter Krieg um Walter Benjamin?*, 2016) やローベルト・プルシェ (Robert Pursche, *Umkämpftes Nachleben*, 2024) らによって、東ドイツにおける受容の模様や、その背景となっている人物交流史が明らかとされてき

ている。

本発表ではこうした成果を踏まえながら、主にゲルハルト・ザイデル編『葉 *Lesezeichen*』(1970年)およびローゼマリー・ハイゼ編『ボードレールにおける第二帝政期のパリ *Das Paris des Second Empire bei Baudelaire*』(1971年)の分析をもとに、東ドイツにおけるベンヤミン受容の特徴を整理する。西ドイツでの出版において中心的な役割を果たしたロルフ・ティーデマンの言説も参照することによって、冷戦時の思想的対立構造、生前のベンヤミンを知る人物たちの多種多様な意図が「編集」という営みを介すことでいかにして作品集に流れ込んでいったのか、そのプロセスを検証する。

ベンヤミン作品の編集をひとつのケーススタディとして取り上げることを通じて、文芸的公共圏と政治的公共圏の交差の模様を示したい。

### 3. 政治的公共圏の脱植民地化をめぐる：ヘルベルト・マルクーゼとアンジェラ・デイヴィスを中心に

大村 一真

本発表は、アメリカの哲学者H・マルクーゼおよびA・デイヴィスの政治的言説から、両者がアメリカの政治的公共圏においていかなる働きをなし、またその働きは当時のアメリカにおいていかなる歴史的／現代的意義が存在したのかを検討することを目的としている。

本発表においては次の二つについて論じることを狙いとしている。第一にマルクーゼとデイヴィス両者の政治的言説を確認しつつ、両者がいかなる政治的問題を主として検討し、またその検討からいかなる政治的洞察を展開したのかを明らかにしたい。

第二に、マルクーゼとデイヴィスのいずれもがアメリカ／ヨーロッパ外の第三世界の政治的問題を取り上げることにより、政治的公共圏を活性化させていたことに注目しつつ、その意味を考察したい。これにより、政治的公共圏の可能性はヨーロッパ／アメリカにおける政治的問題からのみならず、アメリカ／ヨーロッパの外側に広がる政治的問題との相互連携から創出することができるのではないのか、という議論を提起する予定である。

### 4. 文芸批評と政治批評の交差 —K・H・ボーラーの美学

小林 哲也

カール・ハインツ・ボーラー(1932-2021)は『突然性 *Plötzlichkeit*』(1981)をはじめとした美学論考が良く知られる批評家・文学研究者であり、ロマン派やモデルネの文学者の美的経験をめぐる彼の議論は、文学研究において重要なものとして参照されている。しかし、ボーラー自身の美学・思想の検討は少数にとどまり(川合 2007, 2011、石田 2020)、彼の美学と政治姿勢の関係の検討も課題として残っている。本発表では、『フランクフルタ

ー・アルゲマイネ』の文芸欄編集者をしていた 1960 年代後半のボーラーの著作を中心に、彼の美学と政治姿勢の関係を考察する。学生運動へ共感を示すとともに、政治的言説への文学の従属を拒否する姿勢を保持する彼の姿勢と、後年の政治批評との関連を、批評家としての活動を振り返ったボーラーの自伝（Bohrer 2017）も参照しながら検討する。文学における個人的な体験・経験を重視するボーラーの「唯美主義」が、美的領域への内閉に向かうのではなく、政治的言論に接続されることを明らかにしながら、ボーラーの政治的言論に見られる普遍主義批判と初期の批評から見られる歴史哲学的思考への批判との関係を論じる。

## 口頭発表：文学、文化・社会 I (14:30～17:05)

### B 会場 (12 号館 402)

#### 1. ヴァニタスと愚者 — 『阿呆物語』に見るメメント・モリ

森下 勇矢

本発表は、ハンス・ヤーコプ・クリストッフエル・フォン・グリンメルスハウゼンの小説『阿呆物語』（1668）を対象とし、作中に描かれる「愚者」と「死」との関係を、ヴァニタスおよびメメント・モリの思想的伝統との連関から考察するものである。17 世紀ヨーロッパでは三十年戦争による荒廃を背景に、「儚さ」を意味するヴァニタスのモチーフが、絵画・文学・音楽など諸分野で広く用いられた。この時代に成立した本作では、戦争と死が常在する世界を舞台に、主人公ジンプリチウス・ジンプリチシムスの変転する生涯が描かれる。

旧約聖書以来、愚者は神への不信仰や罪と結びつけられ、後期中世には死と隣接する概念として理解されていた（Mezger, 1981）。『阿呆物語』における幼少期のジンプリチウスもまた無知ゆえに愚かであり、周囲の人々の死や世界の変転に繰り返し直面し、その生涯はヴァニタスにより特徴づけられる。プロイアーはこのような無常の表象に、ユストゥス・リプジウスに由来する「恒常性」への要請に対するグリンメルスハウゼンの批判的視線を見ている（Breuer, 1999）。先行研究がヴァニタスや諷刺との関連から本作を論じてきたのに対し、本発表は愚者と死の連関に着目し、死に繰り返し直面しながらも無常を十分に理解しえない認識の不全としての愚者性を、ヴァニタスの文学的表出の一形態として位置づける点に新規性を有する。

#### 2. 式場隆三郎におけるドイツ病跡学の受容と「ゴッホ神話」

石野 光俊

日本で、障害者等の手による芸術作品を先駆的に普及させた人物として、画家・山下清を

世間に紹介した式場隆三郎の名を挙げるができる。戦後の式場による山下に関する記述は、戦前に式場がゴッホを論じた際の語り口と明らかな相似を成す。その特徴は、両者の悲劇的な「人生」と彼らの作品の「健康」を強調する点にある。また、式場は書籍や演劇を通じて両者の「人生」を大衆化した。一部の先行研究は、一連の普及活動を単純な「事業意欲」に基づく行為としている。本発表では、式場が作品の「健康」と作家の「人生」を重視した理由を、彼の思想の原点でありながら、これまで内容が精査されることはなかったドイツの病跡学と伝記小説を基に分析する。

20世紀初頭の病跡学を代表する医師であったヤスパーズは、ゴッホの絵画が統合失調症の影響下にあると結論付けた。ヤスパーズの学説に批判的な式場は、ドイツの精神科医・リーゼの学説に全面的な賛意を示し、ゴッホの絵画に対する精神病の影響を否定する。

式場が「アブノーマル」な芸術に関心を抱くようになったのは、若き日の彼が『白樺』を通じてゴッホに魅了されたことに起因している。式場が数あるヤスパーズ批判の言説のうちでリーゼ説を絶対視したのは、それが『白樺』に掲載された美術史家・マイアー＝グレーフェによるゴッホ論の影響を色濃く受けていたからだと思われる。

リーゼと式場は、作家の「人生」への共感を通じた芸術理解を重視する。本研究により、式場が受容したドイツ語文献それ自体が作品の「健康」と作家の「人生」に焦点を当てる内容だったことが明らかになった。

### 3. H. E. ノサックの「境界」概念再考 — 〈生／死〉表象における脱二元論的傾向

石上 淳史

本発表は、廃墟文学を代表する作家 H. E. ノサック (Hans Erich Nossack, 1901-1977) の作品群における鍵概念である「境界 (die Grenze)」に注目し、1943年のハンブルク大空襲での体験を記した代表作『没落 (Der Untergang)』(短編集『死神とのインタビュー (Interview mit dem Tode)』(1948)所収)をはじめとする1940年代の作品を中心に、彼の〈生／死〉に対する認識を、脱二元論的思考の先駆として再評価しようとするものである。

この「境界」については、制度や慣習の〈内部／外部〉という「境界」が〈海／陸地〉、川の〈此岸／彼岸〉などの形象をとり、母権制や全体主義などに対する抵抗とそこからの脱出欲求を空間的に描出した1950年代の作品に研究対象が偏重していた。Tabassi (2008)、香月 (2013)、Bouaziz (2021) に代表されるように、ノサックの「境界」研究は、「境界」による二元論的認識に基づいて積み上げられてきた。

ところが、彼の多くの作品でテーマとなる〈生／死〉が「境界」で厳密に区分されることは、まれである。作中において生と死は断絶したものではなく、むしろ往還、混在が可能なものとされている。

そこで、本発表では、〈生／死〉という区分そのものが無効であるような作品や、生者と対等、等価なものとして死者を扱う表現手法、生の優位性に疑問を呈するような描写を取り上げ、〈生／死〉というある種階層的な二項対立を問い直そうとする傾向を提示する。それにより、〈生／死〉に対するノサックの特異な認識には、〈男性／女性〉という二分法にとられない「ノンバイナリー」のような、アクチュアルな脱二元論的思考に通じる側面があることを指摘したい。

#### 4. 若きベンヤミンにおけるカント批判の転回 — 「経験」概念から「暴力批判」へ

寒河江 陽

ヴァルター・ベンヤミンの初期思想におけるカント受容は、従来主として認識論的観点から、経験概念の再編として論じられてきた。「来たるべき哲学のプログラム」(1916/17)を中心に経験概念批判を再検討し、初期から後期への連続性を問う研究(Weber 2000、Mettin 2010、茅野 2021)や、「暴力批判論」(1921/22)をカント歴史哲学・倫理学との関連で読む研究(中山 2007、Fenves/Ng 2021)がある。しかし両者の関係は依然として断絶的に理解され、統合的検討は十分ではない。

本発表はこの通説に対し、両テキストを共通基盤で統一するのではなく、カント的形式の限界が異なる領域でいかに露呈するかという観点から再検討する。ベンヤミンの批判はアプリアリ概念そのものではなく、それによって構成される経験概念の限定性に向けられている。すなわちカントにおける経験はアプリアリな統一のもとで成立するが、その前提は意味内容を縮減し、宗教的・歴史的契機を捉えきれない。

この限界は「暴力批判論」において別様に現れる。第一次大戦期におけるカント受容、すなわち『永遠平和のために』が戦争正当化へ転用された状況(Hoeres 2002、Saman 2014)のもとで、ベンヤミンは法措定的暴力と法維持的暴力を区別し、法が暴力に依拠しつつ正当性としてそれを覆い隠す構造を示す。この構造はニオベ神話において具体化される。以上より本発表は、両テキストをカント的形式の限界が異なる仕方で露呈する契機として位置づけ、その批判の射程を再評価する。

### 口頭発表：語学、ドイツ語教育 I (14:30～17:05)

C 会場 (12 号館 302)

1. ドイツ語自然発話におけるジェンダーと世代の交差 — インタビューコーパスを用いた語彙使用の計量的分析

若井田 雅仁

本発表で対象とするのは、インターネット上に動画投稿サイトにあるインタビュー動画をコーパス化したものである。映像や発せられる言葉から、性別・年齢を推測し、0～30代、40・50代、60歳以上の性別・年代層に分け、それらに特徴的な語彙などの統計手法をもとに、その集団がどのような話し方や心的態度をとるかについて、いくつかの観点から計量的に分析し議論する。

これまでのドイツ語圏の社会言語学において、性差と年代層に焦点を当てた調査はいくつか見られるが、そのほとんどが、男女間やコミュニティー間での標準語と方言使用の差異や、音韻的変数に着目したもので、社会階層やアイデンティティーとの結びつき、ポリティカル・コレクトネスによる言語的な正しさが焦点である。

初対面であり、台本や原稿など一切なく、自分の言葉で自分の考えを伝えるインタビューという場面において、それぞれの性別・年代層から発せられる言語情報からどのようなことが言えるのか、助動詞・接続法・心態詞・思考動詞・ヘッジ表現を対象とした「モダリティ分析」、対象をどのように評価したり、形容・強調したりするかの「評価分析」、代名詞・接続詞・フィラーや談話標識に着目した「スタイル分析」の3つの観点から性別・年代層を議論する。

## 2. 基本形屈折と語幹屈折に基づく現代ドイツ語名詞形態論の再構築 — 屈折・派生・複合の統合的記述に向けて

池田 裕行

本発表では、Harnisch (2001) の枠組みを援用し、屈折・派生・複合を横断的に観察することで現代ドイツ語名詞形態論をより体系的に記述できることを示す。

Harnisch は基本形 (= 単数・主格形) がそれ以上分解できない基本形屈折名詞 (例: *Tisch*) と、基本形自体が語幹と語尾から構成される語幹屈折名詞 (例: *Blum-e*) の両タイプが古高ドイツ語から新高ドイツ語にかけて一貫して存在することを主張している。その際、屈折タイプの判別には当該名詞の屈折パラダイムだけでなく、派生語や複合語の観察も必要となる。本発表では、同枠組みを現代ドイツ語の分析に援用した際、以下の記述上の利点をもたらされることを主張する。

まず、屈折においては、男性弱変化名詞を語幹屈折名詞の下位分類として分析が可能になり、女性名詞との複数形接尾辞における共通点も捉えられるようになる。また従来は規則的な記述が難しかった複数形に現れる語幹のウムラウトも、同枠組みでは主に基本形屈折名詞に現れ、語幹屈折名詞では限定的であるという体系的な記述が可能になる。

次に、派生においては、語末シュワーの削除操作という分析や派生独自の語幹の設定が不要になるだけでなく、派生語は一貫して「語幹+接尾辞」であるのに対し、複合語は「語+語」であるという構造上の違いが明示可能になる。

最後に、複合においても、複合語第一要素が単成語の場合の接合要素の生起分布が屈折タイプによって規定されることを Ikeda (2025) が示しており、同枠組みの有効性が確認される。

### 3. Kontra Valenz? — ヴァレンツ理論再考

田中 慎

目的:本発表では, **Jakobs** の論に依拠することで不明確であるヴァレンツ概念を精緻化し, その上でヨーロッパ言語を中心に発展してきたこの概念をより広い言語普遍的な言語の原理として位置付けることを試みる。

説明および先行研究: **Jakobs** (1994) は, 言語学, ドイツ語教育で重用され基本となっている概念であるヴァレンツが非常にあいまいな概念であることを示した。ヴァレンツは, 「核となる語が完全な文を形成する上で, 特定の取りうる要素(項)を要求する」とまとめられるが, その際, 大きな問題となるのはその任意性および基準のあいまいさである。

このヴァレンツの不明確さの問題は, 日本語に適用した場合にも大きな問題となる。日本語ではヴァレンツは弱い原理であり, 主語に限らず動詞の項はすべて任意の要素である。また, 名詞句と時や場所を示す副詞的状況句が同じ形態素で示され明確でない。そのため **Felix** (2003) は, 生成文法で項を規制する  $\Theta$  基準のパラメータ化を提案し, 日本語には  $\Theta$  基準は適応されないとした。また, **Tanaka** (2017) および **田中** (2020) は, ヴァレンツの適用の違いを定性が動詞本体にいわば不可分の形で結びついているドイツ語と定性が動詞から切り離された形で実現する日本語との陳述の仕方の違いとして説明を試みた。

本発表では, これらの個別言語的そして言語横断的に存在する問題を解決するために, **Jakobs** (2022) に依拠し, 従来, 項ではないと見なされていた「時や場所を表す状況句」を項と見なすことによりヴァレンツ理論のより幅広い可能性を示す。

### 4. Aufforderungs-Ethicus について: 発話行為と人称制限

城山 月花

関心の与格として知られるドイツ語与格の用法について, その機能に関する先行研究の多くが, 「話者の感情(片岡 2004)」「個人的関心(*persönliches Interesse*, **Gutzmann** 2007)」などといった漠然とした概念による „Ethicus“ の言い換えに終始しており, 説得力のある解釈はいまだ示されていないように思われる。

本発表では, 現代標準ドイツ語に頻繁に観察される **Aufforderungs-Ethicus** (関心の与格のうち, とくに命令文に現れるもの, **Wegener**1985) を取り上げ, その様々な性質を理解するためには, 認知文法の意味での主観性が有用であることを示す。

**Langacker** (2009) は, 話し手/聞き手には次の 3 つの役割があることを指摘している:

抽象化されたグラウンドでの一般的な役割として現れる話し手と聞き手；発話行為における役割として現れる話し手と聞き手；特定の使用事象における現実の話し手と聞き手（Langacker 2009: 159）。事態に能動的に心的アクセスすると同時に、その事態を起点としたエネルギー連鎖の下流に位置するという与格（経験者）のプロトタイプ（s. Smith 1987）から、Aufforderungs-Ethicus は、抽象化されたグラウンドでの役割（事態の観察者としての役割）をプロファイルすると考えられる。加えて、命令タイプの関心の与格が一人称でしか実現しないという事実は、この形式が話し手の発話行為における役割をプロファイルすることを示唆している。グラウンドにおける話し手／聞き手が、通常は交代し合うから、ある程度対称的とみられる（vgl. collective SELF, Langacker 1985: 123-124）のに対し、命令という発話行為の主体と受け手の間には、明確な非対称性が存在するからである。

### ブース発表（14:30～16:00）

#### D 会場（12 号館 202）

近年の言語学に見られるパラダイムシフトから何が言えるか

渡辺 学

2025 年 11 月に、オーストリアにおける「標準語・共通語」と方言の関係やいわゆる「ドイツのドイツ語（Bundesdeutsch）」との違いなどを検討・考察する Dollinger らの著書 „Österreichisches Deutsch“ が刊行され、注目を集めた。同書からは、言語をめぐる「（国民的）同一性」、そして「言語意識」「言語イデオロギー」の問いも浮上してくる。一方、ドイツ言語学全般に目を転じれば、例えば、近年「解釈的社会言語学」や「知覚方言学」のような試みも散見される。さらに、学知系全体の中でも、「主観性」（または「個別的なもの」）の復権の胎動が感じられる。これは、学問史・認識論的には、主観・客観の二元論の限界から「間主観性」を呈示してみせた人文学の試みにも通底すると考えられるが、研究推進にあたり、いわゆる「客観性」（例えば、「データに語らせる」といったスタンス）への信奉が強すぎたという態度を相対的に眺めようとする視座とも関わるのではないか。

作業仮説も含め発表で試みるのは、(1) 時代ごとのテーマ・部門の潮流の変化やパラダイムシフトが近年の言語学にも見られることを示す、(2) 言語学を例に、「学問的営為」の一部にいわゆる「主観性」や「主観的なもの」が包摂されつつあることを示す、(3) 「主観性」の議論をメタレベルで検討することで見えてくるものがあるかを探る、ことである。

## 第 2 日 5 月 24 日 (日)

シンポジウム II (10:00~13:00)

A 会場 (12 号館 502)

### トーマス・マンの間メディア性

司会：今井 敦

トーマス・マンは 1875 年に生まれ 1955 年に没しているから、2025 年は生誕 150 年にあたると同時に没後 70 年でもあり、各地で様々な催しがあった。そうした際誼い文句となるのは生誕 150 年のほうであるが、受容の観点から見たとき、没後 70 年を越えた意味は大きい。ドイツ語圏及び EU における著作権保護期間は作者の没後 70 年であり、これを越えた 2026 年以降、マンが書いたテキストや翻訳の出版、他メディアへの改作は自由となる。今後、マンはどのような形で受容されていくのだろうか。

これを機に、マンをその表現媒体 (メディア) との関連で考察しようというのが、当シンポジウムの企てである。これまでマンの作物は主に文字を通して受容されてきた。彼は「長編作家 Romancier」、あるいは彼自身皮肉を込めて用いた表現で言えば「文士 Literat」と特徴づけられ、テキストに内在する思想や世界観、すなわち意味を「読み取る」ことが受容の方法であった。それは幾重にも間接的に媒介された芸術と言える。つまり表音文字はシニフィアンとしての音声記号を指示するシニフィアンであるからして二重に間接的である上に、叙事文学 (Epik) とは語り手が聞き手に伝える形式であるという点で、三重に間接的である。だが、文学に目覚めた青年期の彼は、自らを「叙情詩人にして劇詩人」と呼んでおり、散文作家としての彼の自覚は『ブデンプロック家の人びと』以後、徐々に固定化されたものと考えられる。印刷された物語によって「読者」に受容されてきた彼自身、実は、より直接的な表現へのこだわりを持っていたのではないか。

それは第一に、彼のテキストが神経刺激を描写することで直接性の幻を生み出そうとしている点に表れている。読者は登場人物たちの生々しい声や、彼らが奏でる音を聞き、彼らの姿や振舞い、彼らの視覚に映るイメージ、食べた料理の味、匂い、口中の感覚や歯痛までもも知覚するように錯覚する。自ら「詩人の中の音楽家」と称し、もっぱら「耳の人」を自認していたマンの言に反し、彼が充分「目の人」でもあったことは、短編『トリスタン』のモデルとなった友人ホーリッチャーが証言しているだけでなく、作中に描かれた多くのイメージや、視点移動の巧みさにも見て取れる。

また、マンとメディアを語る際に忘れてならないのは、メディア界における彼自身のパフォーマンスである。現存する初期の書簡は出版社との交渉を多く伝えているが、最晩年の日記で目につくのは、自作の映像化や録音についての映画関係者や放送局とのやりとりであ

る。若き日には編集者や書評者の顔も持っていた彼は、のちには映画案の執筆や、戦時中にはラジオによるドイツへの呼びかけ、最晩年にはラジオや映像番組への出演、自作朗読の録音も行っている。そこには、文字性から技術革新を経た新しい口承性・視覚性へと向かうマンの回帰願望が働いていたのではないか。

こうしたマンの多彩な才能と、それゆえ彼のテキストに内在する様々なメディアとの親縁性、変換可能性に焦点を当て、特に、言語・視覚・聴覚を融合した総合芸術としての映画との関係、父の講演や作品の映画化、出版に積極的に関わり、マンと受容者を媒介する「メディア」であったとも言える娘エリカの活動をも論ずることで、マンを再検証し、今後の受容可能性を探りたい。

## 1. マンにおける諸感覚と言語のメディア —朗読者、俳優、雑誌編集者、そして作者として

今井 敦

初期マンに焦点をあて、二つの観点から彼の間メディア性を考察する。

一つは、書簡や同時代人の証言をもとに、創作のみに向かうのではないマンの様々な媒体との関係を明らかにする。文学に目覚めたころの彼は、学友たちと『春の嵐』と題する雑誌を創刊、詩や散文を寄稿し、編集を主宰している。その後も雑誌『二十世紀』『ジンプリチシムス』の編集や原稿審査、書評を担当、『社会』、『パン』、『ノイエ・ドイッチェ・レントシャウ』などに創作を投稿する一方、絵本の制作、朗読会の開催、俳優としてイプセンの劇への出演も行った。

特に、絵入り雑誌『ジンプリチシムス』との係わりは、彼の間メディア性を考える際、重要ではなかろうか。彼はよく、自分の小説は音楽であり特にヴァーグナーの影響が大きいとする一方で、造形芸術との関係は貧しいと述べていた。従来の研究も概ね彼の自己理解に沿った論調であるが、当発表の二つ目の観点としては、彼が音楽や美術からどう影響されたかではなく、彼のテキストにはどんな視覚イメージ、どんな音声、音響が表現されているか、また、臭いや味、触覚など、様々な神経刺激が文字という言語媒体でどう再現されているかに着目する。視覚に関して言えば初期作品では『ジンプリチシムス』のような人物の諷刺的デフォルメが特徴的であり、また、動きが表現されていることを示したい。

以上二つの観点におけるマンのメディアを跨いだ資質は、作品の映画化やラジオ放送出演など、のちの彼の間メディア的活動に繋がるものである。

## 2. 1923年の無声映画 *Buddenbrooks*

別府 陽子

トーマス・マン文学の最初の映画化は、ランプレヒト監督による 1923 年の無声映画

„*Buddenbrooks*“である。マンは映画化を許可した後で内容を知り、知人への手紙に「きわめて愚かで感傷的な映画のドラマ」と批判している。内容は、商人トーマスが穀物を市に収める契約を得て、成功が約束されいながら、弟の代金未送による違約金や義弟の借金肩代わりで倒産の危機に陥るが、舅アルノルトセンの援助で救われるハッピーエンドである。

映画の時代背景はインフレ下の 1920 年代である。冒頭のドキュメンタリー風の映像や、疾走する馬車のクローズアップが、機械化と人々の不安を象徴し、二組の結婚は金庫の移動や指輪を愛でるだけの「貨幣結婚」（ジンメル）そのもので、表現主義から即物主義への移行とみなされている。「物語が語り直される時には、ほとんどいつも翻案がおこなわれている」（ハッチオン）のであり、ランプレヒトも商人一家の没落の物語を大胆に翻案し、ワイマル時代の人々の不安、金銭や資本と権力の関係、女性の商品化の問題を表現した。それゆえこの映画はのちに作られた原作のプロットに比較的忠実な *Buddenbrooks* の映画や TV ドラマとはまったく異なっている。

ランプレヒトは、マンとは別の問題意識をもって *Buddenbrooks* を映画化した。この無声映画は、文学作品を読む際に、視点の置き方によって多様で創造的な読み方が可能になることを示している。

### 3. ハリウッドのトーマス・マン

山本 佳樹

1875 年生まれのトーマス・マンは、映画誕生の年とされる 1895 年にはすでに青年であった。『トーニオ・クレーガー』（1903）で、トーニオの友人ハンス・ハンゼンが夢中になる馬の走行を撮影した写真集は、映画の直系の祖先のひとつであるエドワード・マイブリッジの連続写真に由来する。また、『魔の山』（1924）には、ハンス・カストルプが映画館に出かける場面がある。実人生においても、観客として、バイエルン州の映画検閲官として、（映画化にはいたらなかったが）脚本家として、そして原作者として、マンはさまざまなかたちで映画とかわかった。

マンは 1938 年から 1952 年までアメリカに亡命し、1942 年からはロサンジェルスのパシフィック・パリセーズに居を定めていた。亡命知識人たちの文化的中心地となったマンの家はハリウッドにほど近く、マンは映画スタジオの試写会に出かけたり、映画関係者と交流をもったりしている。本発表ではまず、マンの日記や書簡などを手がかりに、ハリウッドでのマンと映画のかかわりを活写する。

続いて、この時期のマンの文学作品に目を向ける。アメリカ亡命期には、1943 年に『養う人ヨゼフ』、1947 年に『ファウストゥス博士』、1951 年に『選ばれし人』が刊行されている。日常的に映画に触れる環境にあったことが、同時期の創作活動になんらかの影響を与えた可能性は否定できないだろう。その痕跡を探ってみたい。

#### 4. トーマス・マンとエリカ・マン

千田 まや

父トーマス・マンに劣らず多才であり、出版、演劇、映画、ジャーナリズム等、多分野で活躍した長女エリカ・マンは、生涯、父に寄り添い、父の作家活動、講演活動を支えた。Irmela von der Lühe による彼女の伝記や、2019年にミュンヘンで開催された回顧展では、女優、旅行作家、自動車レーサー、ナチスを批判する文学寄席「胡椒挽き」のリーダー、アメリカでの反ナチス活動家、戦争ジャーナリストとしての、エリカ個人の多方面にわたる活躍が紹介された。しかしながら、トーマス・マンの作家活動、講演活動へのエリカの貢献は、トーマス・マン研究においてもエリカ・マン研究においても軽視されてきた。父との共同作業の巧みさが、かえって彼女の貢献を捉えにくくしてきたと考えられる。父の著作や講演への助言者、マネージャー、通訳としての彼女の貢献は、父のエッセイでも語られている。そこで本発表ではそれ以外の二つの活動を取り上げる。一つめは、トーマス・マンの1941年から1945年のBBCのドイツ向けラジオ放送『ドイツ聴取者諸君』の実現への貢献である。二つめは、父の小説の映画化にかかわる活動である。エリカは映画『大公殿下』（1953年）、『フェーリクス・クルル』（1957年）、『ブデンプロック家の人びと』（1959年）の脚本に関わり、作品の映画化に成功している。本発表では、トーマス・マンとその著作を、ラジオと映画という二つのメディアに橋渡ししたエリカの活動を検証する。

### 口頭発表：文学、文化・社会Ⅱ（10:00～11:55）

#### B 会場（12号館 402）

#### 1. カフカの「相撲」と「柔術」—日露戦争と日本イメージをめぐって

藤田 隼風

カフカ研究では中国受容が繰返し論じられてきたのに対し（Lee 1985; 川島 2010; Jobst / Neumeyer 2017）、日本受容は体系的に検討されてこなかった。本発表は近年再評価が進むジャポニズムの影響（Stach 2014; Kilcher 2021）を踏まえつつ、日露戦争期ヨーロッパにおける日本言説とカフカ文学の関係を考察する。

『ある戦いの記録』（1904–07年成立）A稿では、四人の人足が「とてつもなく太った男」を輿に乗せて決死の渡河を試みる。このシーンは中国受容の文脈から李白の伝説に由来するとされる一方（Wagenbach 1958; 川島 2010）、マックス・ブロートによれば日本の浮世絵から着想を得たものであり、Pasley (1993) も東海道連作における相撲取りとの関連性を指摘している。ここでは作品の成立起点1904年8月28日が日露戦争期に当たる点に注目し、戦争報道との関係から後者の日本説を支持する。

『失踪者』（1912-14年成立）には、柔術を操るアメリカの少女クララが登場する。これは日本の格闘技に対するカフカの関心を裏付ける。アメリカと柔術の連想は一見無関係に見えるが、日露戦争期の新聞報道によって形成された一種のステレオタイプである。また、女性クララが男性主人公カールを圧倒するという逆転の構図も当時の国際情勢とは無関係ではない。

以上、同時代メディア言説を手掛かりに、日露戦争を媒介としたカフカ文学における日本受容の一側面——相撲・柔術に象徴される戦闘的な日本イメージ——に光を当てることが、本発表の狙いである。

## 2. 『プルースト-カフカ-ジョイス 入門講義』（1948）再考 —戦後のエリアス・カネッティの文学論の起点として

相馬 大樹

『プルースト-カフカ-ジョイス 入門講義』（Proust-Kafka-Joyce. An Introductory Lecture, 1948）は、エリアス・カネッティ（Elias Canetti, 1905-1994）がイギリスで行った講演である。この講演は、不安定な亡命生活を送っていた当時のカネッティにとって、作家として名前を売り、確実に収入を得られるまたとないチャンスであった。それゆえ、カネッティは妻であり、作家兼翻訳家でもあったヴェーザ（Veza Canetti, 1897-1963）の手も借りて、講演原稿を練り上げることになる。こうした執筆当時の状況に加え、原稿が全て英語で書かれていることもあり、この講演はカネッティのテキストのなかでも例外的な位置づけにある。本発表は、先行研究において主に作家論の文脈から評価されることが多い『プルースト-カフカ-ジョイス』を、戦後のカネッティの執筆活動全体の原点として位置づける試みである。そのために、個々の作家論を細かに追うのではなく、この講演の前半部に提示される議論全体の枠組みに焦点を当て、それを17年後に書かれた『リアリズムと新たな現実』（Realismus und neue Wirklichkeit, 1965）と比較することで、1948年の講演がどのように後年のテキストに接続されたのかを具体的に検証する。またこの講演をめぐる近年、ヴェーザによるゴーストライティングだったという主張もなされている。本発表ではこの説を踏まえたいえで、1948年当時の夫妻の書簡を参照し、講演に対するヴェーザの影響も合わせて検討する。

## 3. 抵抗の技術としての対位法 —テーオドア・W・アドルノの音楽哲学における音楽的主体と唯名論

相馬 巧

テーオドア・W・アドルノの音楽哲学において、作品内に見出される「音楽的主体」とは、作曲家の主観と音楽的素材の客観との対抗的な関係を調停し、両者の宥和を提示するもの

とみなされてきた。この音楽的主体の働きによって、社会的労働の一形態である作曲行為もまた、労働過程に汲み尽くされることなく、「啓蒙の弁証法」の図式に対抗する解放的な潜勢力をもたらす。しかし、従来の研究は美学的な議論に偏重しており、いかなる実践的な条件のもとに音楽的主体の概念が基礎づけられているかを十分詳らかにしていない。

本発表では、音楽的主体がアドルノの作品論においていかなる技法的条件のもとに成立しているかを検証する。そのために論考「新音楽における対位法の機能」における、シェーンベルクの対位法的な作品の「唯名論的な状況」という記述に注目する。まず唯名論の概念を、普遍的な音楽形式が効力を失い、個別的なものが独自の論理を主張する状況として文献学的に定義する。この観点から、自律的な主体として記述される個別な諸声部と全体の構造的秩序のあいだの相克、という対位法のアポリアを検討する。そうして対位法という厳密な技術が、普遍的な音楽形式への抵抗を組織しながら、同時に個別的な声部＝主体から新たな形式を生成させていく過程を理論的に再構成する。以上の考察を通じ、対位法が単なる楽曲構成の手段ではなく、作品の全体性に抗い、その閉鎖性を内部から破砕するパラドキシカルな「抵抗の技術」であることを解明する。

### 口頭発表：文学、文化・社会Ⅲ（10:00～11:55）

C 会場（12 号館 302）

#### 1. Kamerabewegungen, Perspektiven und Blenden während des Drachenkampfes in Fritz Langs Stummfilm-Epos *Die Nibelungen* (1924)

Carlos Peter Reinelt

Der Vortrag untersucht die visuellen Strategien der Drachenkampfsequenz in Fritz Langs Stummfilmepos *Die Nibelungen* (1924). Während der erste Film, *Siegfried*, durch statische Bildkompositionen, Mise en scène und einer „epischen Langsamkeit“ (Eisner 1953: 166) gekennzeichnet ist, stellt die Drachenepisode eine markante Abweichung dar. Anhand eines Close Reading Verfahrens aller 61 Einstellungen und 36 unterschiedlichen Kameraperspektiven identifiziert die Analyse drei seltene Kamerabewegungen (Morgans Analyse [2015] ging fälschlicherweise von einer Bewegung aus) – die jeweils eine narrative Schwelle markieren – sowie systematische Brüche der 180-Grad-Regel und eine ungewöhnlich hohe Schnittfrequenz.

Es wird argumentiert, dass die Kamerabewegungen nicht lediglich als technische Ausnahmen zu verstehen sind, sondern als narrative Mittel fungieren, die Siegfrieds Abstieg in eine tiefere Ebene des Mythos darstellen: Von der höfisch-christlichen

*Nibelungensage*, in der der Drachenkampf nur beiläufig erwähnt wird, hinab in die fantastisch-mystische Welt der *Lieder-Edda*, die sich ausführlicher mit dem Drachenkampf beschäftigt. Dabei wird gezeigt, dass, auch wenn die Forschung bislang den Einfluss von Wagners Tetralogie auf Langs Film korrekterweise als nahezu nicht existent einschätzt (Hauer 1990, Leitch 2015), zumindest der Drachenkampf deutliche Parallelen aufweist.

Die Studie zeigt entsprechend, wie die Drachenkampfsequenz innerhalb des Films eine visuell wie narrativ außerordentliche Position einnimmt und beleuchtet eine weitgehend übersehene Komponente in Langs Stummfilmperiode.

## **2. Kolonialismus kommt nach Hause: Afrodeutsche Lebenswelten im Kaiserreich zwischen Alltag, Exotisierung und Widerstand**

**Manuel Kraus**

In der öffentlichen Wahrnehmung erscheint der deutsche Kolonialismus als außenpolitisches Projekt und Geschichte „außerhalb Europas“. Der Vortrag setzt den Schwerpunkt auf afro-diasporische Lebensrealitäten im deutschen Kaiserreich und demonstriert, wie koloniale Ordnungsmuster im deutschen Alltag wirksam waren. Schwarze Präsenz – so die These – ist nicht randständig gewesen, sondern lässt sich als Schlüssel zum Selbstverständnis der deutschen Moderne begreifen.

Anhand von Primärquellen über Schwarze Alltagsrealitäten wird die Ambivalenz der zeitgenössischen Wahrnehmung verdeutlicht: Schwarze Menschen lebten, arbeiteten und heirateten in Deutschland, wurden jedoch durch rassifizierende Sprache zu einer ‚exotisierten‘ und ‚instrumentalisierten‘ Gruppe reduziert: gesellschaftlich akzeptiert, solange sie den kolonialen Erwartungsmustern entsprachen – ausgeschlossen und marginalisiert, sobald sie diese Grenzen überschritten. Diese Dynamiken werden anhand einiger Fallbeispiele vertieft: (1) Gustav Sabac el Cher, (2) Mtoro Bakari und (3) Martin Dibobe.

Ziel des Vortrags ist es, die afro-deutsche Geschichte nicht als marginale Episode, sondern als zentralen Bestandteil der deutschen Kultur- und Gesellschaftsgeschichte zu begreifen, in der Schwarze Biografien durch koloniale Strukturen sichtbar, aber auch transformiert wurden. Der Beitrag liefert damit einen Impuls zu einer dekolonialen Erinnerungskultur, die Schwarze Perspektiven nicht am Rand, sondern im Zentrum historischer Selbstbestimmung verortet.

### 3. Heimat に特化した文化資本としての少数言語と少数言語教育の役割 —フェール島における外国語としてのフリジア語学習を事例に

**Adam Jambor**

本発表は、フェール島における「第3外国語」としてのフリジア語を事例に、少数言語教育の役割を検討する。近年、欧州では国家マイノリティに対する保護政策が重視され、特に少数言語教育への期待が高まっている。実際、言語存続の危機にあるとされてきた北フリジア語は話者数の減少が続くものの、学校教育における学習者数が増加している。Edwards が指摘するように、より効果的な言語保護には、言語が用いられる社会的環境や話者の意識を含めた検討が不可欠である。

そこで本研究は、北フリジア語教育が話者数の直接的増加ではなく、**Heimat に結びついた文化資本としてのフリジア語の社会的地位を高めることで、間接的に言語維持に貢献する**点を明らかにする。Heimat は「アイデンティティの空間的観念」(Blickle 2004) に基づく概念であり、本研究では社会関係と経験から成る空間への帰属意識として捉える。

聞き取り調査の結果、学校教育におけるフリジア語学習は話者を育成の点では効果が限定的だった。しかし、地域の歴史や現代的課題を扱う授業は、Heimat への帰属意識を強化し、学習存続の意欲を高めていた。以上より、フリジア語教育は文化資本として機能し、アイデンティティの再確認や社会関係の構築を可能にするとともに、間接的に少数言語の維持に貢献していると結論づける。

参考文献

- Blickle, Peter (2004). Heimat – A Critical Theory of the German Idea of Homeland. Suffolk: Camden House.  
Edwards, J. (2010). Minority Languages and Group Identity. Amsterdam: John Benjamins.

#### 口頭発表：語学、ドイツ語教育Ⅱ (10:00～11:55)

D 会場 (12 号館 202)

#### 1. Im Wandel der Zeiten – Füllwörter zwischen Funktion und Kritik

**Sabine Randhage**

Kaum ein sprachliches Phänomen im Deutschen weist derart unterschiedliche Bezeichnungen auf wie die umgangssprachlich so genannten Füllwörter. Während sie in der Linguistik weitaus differenzierter als Modal-, Abtönungs- oder Diskurspartikel, als Diskurs-, Hesitations- oder Verzögerungsmarker sowie als Hecken- oder gar Präsentationsausdruck klassifiziert werden, erhöht sich mit der steigenden Anzahl der Bezeichnungen auch die den Füllwörtern zugeschriebene Anzahl spezifischer

Charakteristika.

Durch die kontrastiv-vergleichende Analyse ausgewählter Vertreter der Kategorie der Füllwörter vor dem Hintergrund der aktuellen, aber auch historischen Forschung (z. B. Helbig/Kötz 1981, Weydt 1981, Gutzmann 2024, Frilling 2025) zeigt sich, dass das Füllwort als solches im Wandel der Zeiten eine erhebliche Erweiterung seines Funktions- und Bedeutungsumfangs erfahren hat. Dies liegt weniger in der veränderten Gebrauchsweise älterer, sondern vielmehr in der Nutzung immer neuer Füllwörter begründet. Ein detaillierter Blick auf jene aktuellen Füllwörter (z. B. „genau“, „safe“) lässt erkennen, wie genau sich die Funktionen und Bedeutungen der Kategorie der Füllwörter verändert bzw. erweitert haben. In diesem Zusammenhang können auch regionale, soziale und generationsbedingte Unterschiede in der Verwendung von Füllwörtern festgestellt werden.

Darüber hinaus sind deutliche Divergenzen in der Rezeption von Füllwörtern erkennbar, denen einerseits durchaus nützliche Eigenschaften attestiert werden, während sie andererseits auf strikte Ablehnung stoßen. Vor diesem Hintergrund ist die sprachkritisch wie funktional bewertende Einordnung des Gebrauchs von Füllwörtern bei DaF-Lernenden besonders interessant.

## **2. Auditive und akustische Analyse von Audioaufnahmen zur Beschreibung und Quantifizierung von Ausspracheabweichungen mithilfe von MAXQDA**

**Ralph Degen**

Wie lässt sich die Kluft zwischen akustischer Phonetik und auditiver Untersuchung von Aussprachephänomenen schmälern, um Lehrenden ohne extensives phonetisches Fachwissen die Diagnose der Ausspracheabweichungen ihrer Lernenden zu ermöglichen, sowie durch den Vergleich von Vorher-/Nachheraufnahmen ihre eigenen Unterrichtsaktivitäten zum Aussprachetraining zu evaluieren. Dies soll hier exemplarisch am Schwa in der en-Endung untersucht werden. Während es in der Standardaussprache in den meisten Fällen elidiert ist, wird es von Lernenden oft realisiert oder als Vollvokal überartikuliert. Um die Aussprachedaten zu quantifizieren, muss zwischen Kategorien wie Elision, Realisierung und Überartikulation entschieden werden. Hierzu soll eine nachvollziehbare Verbindung zwischen dem auditiv wahrgenommenen Laut und dessen bildlicher Darstellung in Praat erarbeitet werden, indem die akustischen Eigenschaften

dieser Kategorien unter Berücksichtigung der didaktischen Ziele beschrieben und auditiv überprüft werden. Dabei stütze ich mich auf die methodische Vorgehensweise bei der Messung der akustischen Eigenschaften in Untersuchungen zum Schwa-Laut u. a. bei (Davidson, 2006) (Piroth & Skupinski, 2011) und (Zimmerer & Reetz, 2011).

Davidson, L. (2006). Schwa Elision in Fast Speech: Segmental Deletion or Gestural Overlap? *Phonetica*, 63(2–3), 79–112

Piroth, H. G., & Skupinski, P. (2011). On the Realization of Schwa in Two Varieties of Standard German. 17th International Congress of Phonetic Sciences, ICPhS 2011, Hong Kong, China, August 17-21, 2011, 1606–1609.

Zimmerer, F., & Reetz, H. (2011). Same or Different? Schwas in Naturally Spoken German. 17th International Congress of Phonetic Sciences, ICPhS 2011, Hong Kong, China, August 17-21, 2011, 2324–2327.

### **3. Lernorganisation, Lernleistung und Ressourceneinteilung, wie sie zusammenhängen und wie wir sie fördern können**

**Frank Nickel**

Der Vortrag beschäftigt sich mit Ressourcenmanagement-Strategien im DaF-Unterricht an japanischen Universitäten und ihrem Zusammenhang mit akademischer Selbstwirksamkeit, einem zentralen Konzept der sozial-kognitiven Lerntheorie nach Bandura. Ausgangspunkt sind die im Hochschulkontext etablierten Skalen des Motivated Strategies for Learning Questionnaire (MSLQ) nach Pintrich sowie Befunde, die positive Zusammenhänge zwischen Lernstrategien, Selbstregulation und Leistung zeigen.

Aufbauend auf dieser Forschung werden in einer Befragung von rund 250 Deutschstudierenden im Raum Tokio die vier Ressourcenmanagement-Strategien Zeit- und Lernumgebung, Anstrengungsregulierung, kooperatives Lernen und Hilfesuchverhalten sowie akademische Selbstwirksamkeit (van Zyl et al., 2022) in japanischer Übersetzung erhoben.

Die Ergebnisse bestätigen zwar die erwarteten positiven Korrelationen zwischen allen Strategien und Selbstwirksamkeit, zeigen jedoch, dass im Regressionsmodell ausschließlich Hilfesuchverhalten einen signifikanten Unique-Effekt auf akademische Selbstwirksamkeit besitzt. Daraus ergibt sich die These, dass im frühen universitären DaF-Unterricht in Japan insbesondere adaptives Hilfesuchen – etwa das aktive Nutzen von Unterstützung durch Lehrende und Kommiliton:innen – ein Schlüsselmechanismus für den Aufbau akademischer Selbstwirksamkeit ist. Didaktisch wird daraus abgeleitet, dass Lehr-Lern-Arrangements Hilfesuchverhalten systematisch entstigmatisieren und

strukturell erleichtern sollten.

#### **Literatur**

Fujita, K. (2010). Autonomous help seeking and student learning in Japan. *Educational Research*, 47, 43-52.

Pintrich, P. R. (1991). A manual for the use of the Motivated Strategies for Learning Questionnaire. Ann Arbor: University of Michigan.

Schwarzer, R., & Jerusalem, M. (2003). SWE. Skala zur Allgemeinen Selbstwirksamkeitserwartung. In Leibniz-Institut für Psychologie (ZPID) (Hrsg.), Open Test Archive. ZPID. Leibnitz.

van Zyl, L. E., Klibert, J., Shankland, R., See-To, E. W. K., & Rothmann, S. (2022). The General Academic Self-Efficacy Scale: Psychometric properties, longitudinal invariance, and criterion validity. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 40(6), 777-789. <https://doi.org/10.1177/07342829221097174>